

「彦火々出見尊絵巻」図像私註(三)

—幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために—

古 田 雅 憲

The Visual Thinking Strategies for "The Emaki
of UMISACHI & YAMASACHI"(3)

Masanori Furuta

【はじめに】

幼児・低学年児童の古典学習のために、明通寺蔵『彦火々出見尊絵巻』を「読み聞かせ」学習材として再構成する—その目論見は旧稿（後掲・参考文献10, 11）のままに、今回は巻三部分を取りあげる。

その趣意は旧稿で詳しく述べたとおり、次期小学校学習指導要領に言う「伝統的な言語文化に関する事項」にかかる実践的なプログラムを開発することにある。それに際して特に意を注いだのは、「伝え合う力を高める」という国語科の大目標に従う古典教室として、児童相互の「交流」を活性化する学習活動となるように、という点である。

具体的には、「海幸彦・山幸彦」の神話に題材を得た古典絵画として質・量ともに秀でた明通寺蔵『彦火々出見尊絵巻』を取り上げ、まず古典絵画をよく「見る」ことを通じて、児童相互の「話す・聞く活動／交流」を活性化しようとする。次に、発達段階に応じてリライトした本文によって「内容の大体を知り」、その上で「音読すること」を楽しんだり、「国の始まりや形成過程、人の生き方や自然などについての古代からの人々のものの見方や考え方」について話題にしようとするのである。

ともあれ、そのようなことについては旧稿冒頭に縷々述べたことでもあり、

今ここに繰り返さない。必要に応じて参照されたい。以下、さっそく巻三・各場面について図像私註を示し、併せて詞書を踏まえた読み解きを提案したい。

【第十三場面（下掲・図版①）／巻三・第二～三紙の読み解き】

巻頭詞書（第一紙）に続いて第十三場面となる。舞台は、前場面（巻二末尾・第八紙左半～第九紙）と同じく海宮主殿らしいが、その趣きは少し異なっている。あるいは会所のような別室・別棟ということか。

その造作は、表面や側面を紺瑠璃・緑瑠璃で荘厳した（その意匠は前場面と異なる）基壇の上に、丹塗りの部材で柱・長押を組み上げたものである。前場面ではおよそ五間分の空間を霞中に垣間見せるばかりだったが、ここではほぼ十間の全容を明らかにしている。それだけでかなり横長の構図となるが、画面はさらに左方に開かれていて、主殿左端の軒先に配された磯の大岩に続いて、砂浜と波も逆巻く荒海原とが広がっている。

室内、床一面には花紋の氈が敷き詰められている。調度品の設えも、山水を描いた障子、錦の褥、唐木の脇息など様々に豊かである。画者は、ここでもまた筆を尽くして舞台の荘厳華麗を描き出している。



<図版①：参考文献5による。以下同。>

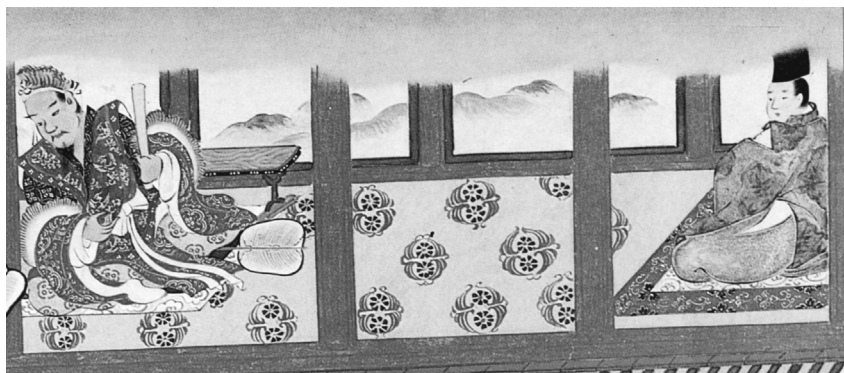
この場面、諸賢の夙に指摘するとおり、異時同図の巧みな作例である。この十間ほどの室内外に、延べ十七人の人物が時間的に連続する六シーンを構成している。



まず第一シーンは弟宮と龍王との対面である（下掲図版②・部分拡大図）。

画面右端が弟宮である。前場面までと同様に狩衣を着し、頭には立烏帽子を

被り、花唐草をあしらった錦の褥にゆったりと座している。客人として丁重に扱われていることがわかる。



<図版②>

一方の龍王も前場面と同様、袞龍の御衣・繡裳を着し、頭には金色鯨形の冠を被っている。愛用品と思しき唐木の脇息や唐扇も傍らに見える。手に笏を持っているから、儀礼に則った対面に、王者の品格を以て臨んでいることがわかる。

前場面の龍王は、闖入者（弟宮）に対して露骨な不快不審を体現していた（相手を指差そうとするとともに、唐扇の柄で床を打ち鳴らす風であった）から、ずいぶんの変化である。

巻頭詞書に「まへにめせは、まいれり。ことのこゝろをとふ。はしめよりのことを、あんのくたりのことをかたる」と言うのは、ちょうどこのシーンのことである。龍王は弟宮の素性と事情とを知って、態度を一変させたのである。

以上のような画註と詞書を踏まえて、このシーンを幼児・低学年児童に読み聞かせるための一文として、次のような再構成（リライト）を行った。

「どのような わけで、この く にに おいでかな？」

りゅうおうさまの しつもん に、やまさちびこは、これまでの ことを はなしました。

「なるほど なるほど。それでは わたしが ちからに なりましょう。」

りゅうおうさまは にっこり わらって だいじんの ほうを ふりかえり
ました。

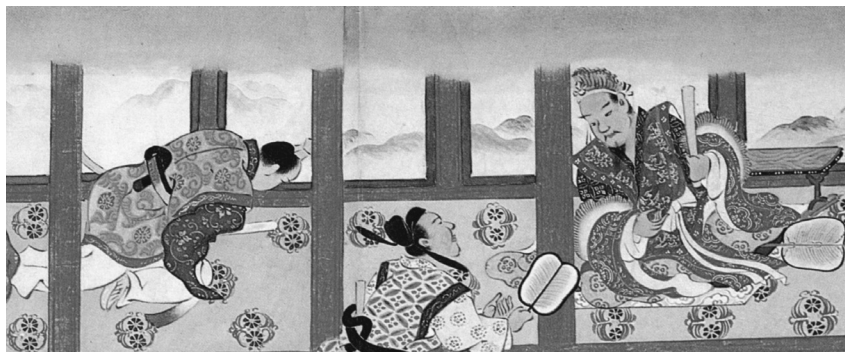
■はなしあってみよう■

やまさちびこが りゅうぐうじょうに きたのには、どのような わけが
あったでしょうね。おはなしの さいしょから おもいだしてごらん。

末尾に「はなしあってみよう」の一項を設け、ここまでの粗筋を振り返る契機としてみた。絵本や物語の読み聞かせてもらいつつ、時宜に応じて、幼児・児童自身が感じたことや分かったことを言葉にしてみても、それぞれに話したり聞いたりするような「交流・心を通わしあう活動」が活性化するよう心がけたい。



ただし、その龍王は振り返って弟宮の方を見てはいない。すでに第二シーンが始まっているのである（図版③・部分拡大図）。



<図版③>

龍王の視線は、図像としては室外の侍者に向けられている。が、そちらは実は第六シーンを構成する人物である。物語の時間では、まず室内・龍王の背後にいる侍者との関係が先である。（この場面、龍王は三つのシーンを同時に演じているよう描かれているのである。）

その唐風の冠を被った侍者は眼前の龍王に向かって平伏している。こちらも笏を持っているようだから、礼に則って龍王の言葉を承っているものとわかる。

巻頭詞書に「龍王きゝて、ひとめしてせんしをくたす。諸国に、つりはりのとにたててやむ百姓やあると、たつねさす」と言うのは、ちょうどこのシーンのことである。弟宮の語る「案の件の事」を聞いた龍王が、釣針を探し求めるべく宣旨を下したのである。

以上のような画註と詞書を踏まえて、次のように再構成してみた。

「やまさちびこどのの つりばりを きっと さがしてくるのじゃ。」

「はい、かしこまりました。」

りゅうおうさまの めいれいに、だいじんが ふかぶかと れいをして
こたえています。



第三シーンは場面左端である
(図版④・部分拡大図)。

逆巻く荒海の波間から二人の人物が現れる。

前に行く人物は、頭に金色竜頭の冠を被り、唐風の礼服姿も美しく整えたうえ、両手に笏を持っている。紺色の綬をたなびかせつつ、白波を蹴立てて進んでいるから、龍王の許へ出仕を急いでいる高官であるとわかる。失われた釣針に関する大切な情報をお届けしようというのだろう。



<図版④>

後に従うのは、髪を露わに逆立てた異形者である。全身緑色の皮膚、隆々たる筋骨、尖った耳、盛り上がる額の力瘤、固く結んだ大きな唇、息も荒げに膨らませた鼻孔、かっとなばかりに見開いた眼など、いかにも邪鬼を思わせる描出である。どのような経緯かは知らず、今は従順に宝筐を捧げ持ち付き随っ

るのである。彼のような「異形」を描く画者の筆は特に冴える。ちなみに、後続の巻に於いても、百鬼夜行を思わせるような「異形の行列」が繰り返し描かれる。

以上のような画註と詞書を踏まえて、次のように再構成してみた。

あおおにを めしつれた だいじんが、おおいそぎで やってきました。
つりばりが のどに ささって ないている おとこが みつかったのです。



第四シーンは再び場面右方に目を転じなければならない(図版⑤・部分拡大図)。主殿軒先の砂浜にいる三人の人物と、振り返って彼らを見る基壇上の人物とがこのシーンを構成している。

まずシーン中央、ずいぶんと太った男が砂浜に胡座をかいて座っている。短袖・腰切の帷子を着し、頭には菱烏帽子を被っているから、漁を生業とする凡下であるとわかる。彼の喉元はずいぶん腫れているらしく、首も肉に埋もれてしまっている。



<図版⑤>

巻頭詞書に「しはしありて、のとはれたるものさふらふとて、めしいてたり。みれは、おもてあかみたるをとこの(欠字あり)ふとりたる、のとおほきにはれたるあり」と言うのは、この男のことである。言うまでもなく、その正体は、先に山幸の釣針を咥えたまま去った大魚である。よく見れば彼の耳先は鰓みたく細く尖っている風に描かれているが、それは、先の異形者ほどではないにしても、やはり人ならぬ者であることを暗示しようとする画者の筆の工夫である。

さて、その男の喉元を左手で探っている人物は医者である。唐風の華麗な衣装を身にまとい、頭には立派な魚形の冠を被り、また立派な靴沓を履いている。

右手に持った唐扇を後帯に差し挿みつつ、これから仕事に取りかかろうかという風である。巻頭詞書に「くすしをめて、のとをさくらす。おほきなるつりはりぬきいてつ」と言う。男の喉を探り、これからの作業の手順か何か、基壇上の侍者に話しかけている風である。

両人の傍らには、腰に刀を帯びた男が立っていて、事の推移を見守っているらしい。彼は素足のまま、脚には魚頭形の脚絆を着け、頭には栄螺形の冠を被っている。下級の武官ということだろう。両掌を開いているその仕草は、古絵巻類に、「驚き」を示唆する図像としてよく見出される場所である。事の推移を見守りながら、「やっぱり、この男が…！」と呟いたところか。

以上のような画註と詞書を踏まえて、次のように再構成してみた。

のどに ささった つりばりで ないていたのは、たいたろうという
りょうしでした。おいしゃさまが しんさつを していますね。

「なるほど、のどの おくに おおきな つりばりが ささって おるぞ。」

■えをよくみてみよう■

そばで みているひと (かいの ぼうしを かぶっている ひと) は、どん
なしぐさを していますか、まねを してごらん。

——みんなは どんなとき、そういう しぐさを しますか。

末尾に「えをよくみてみよう」の一項を設けた。簡単な動作化を通じて、この場面に漂う「気分」を追体験する契機とする意である。その「気分」が「驚き」であれ「安堵」であれ、たとえば「そばでみているひともびっくりしたり、ほっとしたりしました」のような「言葉」で予め与えられるばかりでは、やはり「交流」とは言いにくい。時には描かれた人物の所作をまねてみて、その意味を自分の体験から想像し言語化するような活動があってこそ、「絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる」活動（幼稚園教育要領）の実践となるだろう。



第五シーンはさらに場面右方に目を転じてゆかなければならない（図版⑥・

部分拡大図)。主殿正面の軒先にいる三人の人物と、室内から彼らを見守る二人とがこのシーンを構成している。

例の医者は左手で太った男の額を押さえつつ、右手に持ったやっこを、男の口中に突っ込んでいる。せっかくの衣装も片肌脱ぎにしているから、医者も全身にたいそう力を込めているらしいと分かる。

男はやっこで喉奥を引っぱられて前のめりになっている。ひどく引っぱられたからか、ついには口から血さえ流れ始めている。たまらず男は地面に右手をつき、左掌を開いては、あたかも治療中止を懇願するかのようである。

どこから現れたのか、男の両耳を引っぱって治療の手伝いをしているらしい者もいる。短袖・腰切姿に幞頭を被ったその男は、身なりから漁撈仲間らしいとわかる。なるほど彼の耳先も鰓みたく尖っている。

その様子を、室内から高官たちが心配げに見守っているようである。一人は唐扇を杖代わりに、また一人は柱に凭れかかりつつ。あるいは軒先の光景に、少し気分でも悪くなったということか。



<図版⑥>

以上のような画註と詞書を踏まえて、次のように再構成してみた。

おいしゃさまが つりばりを ひっこぬこうと しています。

「うんとこしょ、どっこいしょ！」

まだまだ はりは ぬけません。おいしゃさまは きんじょの りょうしを
よんできました。

「うんとこしょ、どっこいしょ！」

まだまだ、まだまだ ぬけません。

たいたろう、とても いたそうですね。だいじんたちも おそろおそろ

みつめています。

ちなみにこの場面のリライトには、あえて「大きなかぶ」にも用いられている表現を援用してみた。このような企みにはむろん批判もあるだろうが、小学校国語科でおなじみのフレーズに接した児童たちが、「大きなかぶ」のことを思い出して笑ったり声を出したりするようなことがあるならば面白い。何よりもまず読み聞かせを聞く幼児・児童を喜ばせることが大切で、そこから「読み聞かせを聞くことで、伝統的な言語文化に触れることの楽しさを実感できるようにする」(指導要領解説)という回路が開くのである。本稿等における論者の視点はそのようなものである。



最終・第六シーンはさらに場面右方に展開している(図版⑦・部分拡大)。主殿軒先にいる医者と太った男、基壇上の侍者、室内の龍王がこのシーンを構成している。



<図版⑦>

太った男は右手で喉元を押さえつつ、左手では砂を握りしめてその場に倒れ伏している。いかにも苦しげに顔をしかめ、口

からはなお出血している。その傍らに立つ医者は、右手にやっここを持ったまま、簀子縁上の侍者と龍王の方を眺めやっている。いまだ片肌脱ぎではあるが、もはや力仕事は終わったとの体である。

さて、彼の視線の先にいる侍者は主殿の階を駆け上がった風である。よく見ると、その左手には釣針が確かに握られているのである。彼はそれを龍王に手渡すために、慌てて階を駆け上がったのである。龍王の視線は、その釣針に注がれている。

巻頭詞書に「このつりはりをぬきてみするに、そのつりはりなり。よろこひ

てとりつ」と言うのはちょうどこのシーンのことである。

以上のような画註と詞書を踏まえて、次のように再構成してみた。

やっと はりは めけました。
 だいじんが みつかった つりばりを りゅうおうさまに てわたそうと
 しています。
 「りゅうおうさま、おさがしの つりばりは これに ございます。」



龍王を起点として反時計回りに画面を一周するにつれて、物語の時間も進みゆく。そして再び龍王が現れたとき、ついに失われた釣針が手許に還ってくるというのである。円環的な各シーンの配置構成と、遺失物の返還という物語上の円環構造とが見事に重なり合っているとと言えるだろう。そのような画者の筆力は、たとえ医者片肌脱ぎの左右をうっかり取り間違えることがあった（第五シーンでは左肩、第六シーンでは右肩が露わになっていて不自然である）にしても、すばらしく充実したものであったに違いない。

【第十四場面（下掲・図版⑧）／巻三・第四紙左半～第五紙右端の読み解き】

第四紙右半の詞書を挿んで第十四場面となる。舞台はやはり海宮内の一室であるらしいが、前場面等の舞台・海宮主殿とは異なる場所であろう。これまでになかった宝形作りの楼閣の屋根が見えていたりもする。

その一室の造作は、表面を霰紋の石畳で敷き詰め、側面を紺瑠璃・緑瑠璃で荘厳した基壇の上に、丹塗りの部材で柱・長押を組み上げたものである。その室内の床一面には花紋の氈が敷き詰められ、障子には山水景が描き添えられている。前場面の海宮主殿ほど豪華な風はないが、小さいながらも海宮の一室に相応しい設えである。

画中詞に「よひよりは、このやにいらせたまへと、龍王まうしたまふところ」と言う。なるほど画面を覆う霞には薄墨が濃く含ませてあるから、宵闇の近いことがわかる。

室内では二人の人物が相對している。言うまでもなく左方が龍王である。着

衣、被り物とも前場面と同様である。龍王は、手にした笏の先を口元に翳しているようである。

直前の詞書に「龍王のいふやう、ひのもののみこに、わかむすめあはせむとなんおもふ。しかるを、みこ、こゝにきたりたまへり。うれしきことかきりなし。こよひより、このねやにいるへきなりといひて、むすめにあはす」と言うのは、ちょうど



<図版⑧>

この場面である。龍王は、弟宮を海宮の婿に迎えようと掻き口説いているのである。

その龍王に対してののが右方・弟宮である。こちらも着衣、烏帽子とも前場面と同様である。特に敷物を用いてはいないが、柱近くにゆったりと胡座をかいて座している。その図像はいかにも思案投げ首、即答しかねるといった風だが、詞書等にその心情は語られない。ただし龍王の姫を見たとき、「みれば、かとにありつるたまのをんなをいみしとみつるに、それは、これにあはすれば、まことにかたるのことし。よろこひて、めをとことなりぬ」と詞書には言う。

以上のような画註と詞書を踏まえて、次のように再構成してみた。

「じつは やまさちびこどのに おねがいごとが あるのです。」

「たすけて いただいた おれいに、わたしが できることなら なんでも やりましょう。」

「では おねがい いたしましょう。わたしの むすめのおとひめと、どうか けっこんしてください。」

りゅうおうさまの ことばに やまさちびこは とても おどろきましたが、おもいきって けっこんする ことに しました。

ちなみに龍王の姫の名は詞書等には見出されない。ここに「乙姫」と称したのは、それが「浦島」の昔話を通じて、幼児・児童にもなじみ深いものだからである。先の第九場面の再構成に際して、やはり「竜宮城」と称したのと同じ理由である。

【第十五場面（下掲・図版⑨）／巻三・第五紙右半の読み解き】

前画面にすぐ続いて第十五場面となる。舞台は海宮内の後宮、龍王の姫の部屋にほど近い回廊である。そこは側面を紺瑠璃・緑瑠璃で荘厳し、表面の石畳を霰紋に敷いた壇上である。その両端には丹塗りの部材で組み上げた欄干を備えている。そして、その中央には見事な花紋の大氈を敷き渡してある。全体美しい海宮の中でも特に装飾的な設えである。

さて、その回廊を三人の人物が左方に向かって進んでゆく。回廊端の左右にいて灯火を捧げ持っているのは中宮職と思しき二人である。回廊中央の氈上を行く弟宮の足下を照らしているのである。周囲はいよいよ薄暗くなっている。霞に刷かれた薄墨も前画面よりさらに濃い。



<図版⑨>

弟宮は前画面と違って、紺色も鮮やかな袴の上に、色とりどりの桔梗紋を散らした狩衣を着ている。龍王から婚礼の祝儀として贈られたものということだろう。この場面の画中詞に、「むこになりているところ」と言う。

以上のような画註と詞書を踏まえて、次のように再構成してみた。

けっこんの おいわいとして、やまさちびこは りゅうおうさまから
りっぱな ふくを いただきました。

きがえた やまさちびこは、ふたりの あんないやくに みちびかれて、
おとひめさまの ところに むかいます。

【第十六場面（下掲・図版⑩）／巻三・第五紙左端～第六紙の読み解き】

前場面にすぐ続いて第十六場面となる。回廊の先、吹抜屋台の構図で描かれた龍王の姫の部屋が舞台である。



<図版⑩>

朱塗りの部材で組んだ柱・長押越しに、また巻き上げた青簾の下から、美しい花紋の氈を敷き詰めた室内が見える。奥の間との境には花唐草の帳が下ろされ、その前には、姫のお出ましに備えて錦の褥が敷かれている。

その褥を囲むようにして五人の女官が控えている。いずれも髪上げて釵子を飾り、色とりどりに鮮やかな領巾裙帯の唐朝服を着し、手にはやはり色とりどりの唐扇を持っている。姫君の婿となる弟宮の訪問を待つ体に違いないが、立ったり座ったりなんとも落ち着かない風である。

下りた帳の向こう側、山水の障子も美しい奥の間にいるのが、画中詞に言う

とおり「龍王のひめきみ」である。髪は整えられているものの、美しい緑色の衣は脱ぎ着の途中らしく、胸元もはだけているような有様である。さらに奥から女官が異色の衣を運び来たっているようだから、あるいは緑の衣はお気に召さなかったか。お側の女官の領巾を持つ手も慌ただしげである。

詞書に「(弟宮が姫君を) みれは、かとにありつるたまのをんなをいみしとみつるに、それは、これにあはすれば、まことにかたゐることし。よろこひて、めをとことなりぬ」と弟宮の一目惚れを言うが、それはこの場面の直後のことである。

以上のような画註と詞書を踏まえて、次のように再構成してみた。

おとひめさまのへやはまるでひかりかがやいているようです。そのようすきたら、ほんとうにえにもかけないうつくしさでした。

やまさちびこがくるときて、おとひめさまはおめかしのまっさいちゅう。

じじよもあわててきがえをてつだいます。ほかのじじよたちも、どきどきそわそわ、おちつきません。

やまさちびこは、おとひめさまのことがとてもきにいました。

【第十七場面 (図版⑪) / 卷三・第六紙左端の読み解き】

巻末に四人の女性が描かれている。立ち姿で見返る一人は、朋輩に裙帯を結んでもらっている。また左手に八稜鏡を使いつつ刷毛で紅を差している一人は、やはり別の朋輩に髪を作ってもらっている。この四人、山幸彦の婿入りに合わせて、それぞれ交互に忙しく身だしなみを整えているのである。



<図版⑪>

この図像自体、独立した一幅の絵のように見える。それは、前場面の時間や空間から切り離されて唐突に、しかも霞の此方側に描き添えられかのようなからであろう。絵それじたいとしてはとても美麗のものではあるが、物語の進展に不可欠というものでもないので、幼児・児童のための「読み聞かせ古典絵本」の一頁からは省いてよい。

※以下、次稿に続く。

参考文献

- (1) 稲本万里子 (2003) 「描かれた出産—『彦火々出見尊絵巻』の制作意図を読み解く」(服藤早苗, 小嶋菜温子(編)『生育儀礼の歴史と文化—子どもとジェンダー』森話社)
- (2) 稲本万里子 (2007) 「描かれた結婚—源氏物語絵巻 彦火々出見尊絵巻を中心に」(小嶋菜温子(編)『平安文学と隣接諸学 3 王朝文学と通過儀礼』竹林舎)
- (3) 大林三千代 (1975) 『『すみよしえんき』における彦火々出見尊の説話について』(「国文研究」4)
- (4) 小松茂美 (1979) 『日本絵巻大成 (22) 彦火々出見尊絵巻・浦島明神縁起』(中央公論新社)
- (5) 小松茂美 (1992) 『続日本の絵巻 (19) 彦火々出見尊絵巻 浦島明神縁起』(中央公論新社)
- (6) 高畑勲 (1999) 『十二世紀のアニメーション—国宝絵巻物に見る映画的・アニメ的なるもの—』(徳間書店)
- (7) 永井久美子 (2001) 「弟の王権—『彦火々出見尊絵巻』制作背景論おぼえがき」(「比較文学・文化論集」18)
- (8) 中根千絵 (2004) 「院政期文学に現れる老賢者」(「アジア遊学」68)
- (9) 西本鶏介 (2004) 『海幸彦山幸彦 日本の物語絵本』(ポプラ社, 藤川秀之絵)
- (10) 古田雅憲 (2009) 「彦火々出見尊絵巻・図像私註 (一) —幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために—」(「西南学院大学人間科学論集」5巻1号)
- (11) 古田雅憲 (2010) 「彦火々出見尊絵巻・図像私註 (二) —幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために—」(「西南学院大学人間科学論集」5巻2号)

(12) 山内英男 (1974) 『彦火々出見尊絵』研究序説(「東洋大学大学院紀要」10)

※本稿では『彦火々出見尊絵巻』の図像理解に直結するものだけに限った。論旨全体に関するものは前稿(参考文献10)に掲げたので参照されたい。

西南学院大学人間科学部児童教育学科